

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

ふるさとの家

毎年、お盆休みに入ると、帰省ラッシュのニュースが流れる。そのニュースを見ていると、高速道路の車の渋滞や新幹線の混雑で大変な思いをして帰られる方々には申し訳ないが、日本人のふるさとや地域への愛着はまだまだ健在だと、なんだかホッとした温かい思いが込み上げてくる。

帰るふるさどがあることは、日常を離れ、今の状況を確認するいい機会でもある。ふるさどがあることを、うらやましいと思う方々も増えてきた。

実家はあるが、すでに空き家。ご両親が他界されたり、施設に入っていられたりして、空き家問題はどんどん深刻化している。

先日、知人が淡路島の実家を取り壊したと話していた。兄弟は多いが、みな還暦を越え、各地に拠点を構築して久しいため、誰も実家を管理する人がいない。母親の葬儀を済ませ、間もなく家を解体したとのことだった。旧家の太い柱や梁でできた邸宅は、壊すだけで何百万円も業者に支払ったとお聞きした。

古材市場や古材ネットな



ど、古材を扱う業者も全国に増えたとはいえ、なんでも煩雑に感じる親資産の整理の時期には、地域性も相まって早い処分となることが多い。床柱はもろろんのこと、欄間の一つにも思い出と愛着がしみ込んでいることを思うと、なんだが複雑な思いに駆られる。

リフォームでは、「家への愛着」という言葉をよく耳にする。

あまりの大規模リフォームに「なぜ建て替えなかったのですか？」と、思わずお聞きすることもあるのだが、この格天井を残したかったとか、タイルをここに張ったまま使いたかったとか、家には各所に思い出が刻み込まれているのである。

「家を壊すと、私の人生が消えてしまう気がする」とおっしゃった方もいた。毎日積み重ねた人生の歴史は、家とともにあったということなのだろう。自分の終の住処を定めた時、その家がふるさとの我が家でなかったなら、いず

れば、ふるさとの家とのお別れの時が訪れるかもしれない。「人生至る所青山あり」と思っていた若い頃とは別に、終の住処を考えることが多くなる年齢になると、ふるさとの関わりは減ってくる。

団塊ジュニアのふるさどは、どうなるのだろうか。地域に点在していると思っていたふるさども、団塊ジュニア世代になると、三大都市圏で生まれた人が四九%を占めるということだ。彼らのふるさどは、大都市そのものである。

室生犀星の詩のように「ふるさとは遠きにありて思うもの」ではなく、地域が都市に限定され、すでにそこがふるさとの世代が誕生している。ふるさどとは何なのか？ ふるさどへの愛着も、大きく様変わりしそうだ。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。(社)日本建築家協会正会員。